

蘇詞集編纂考

原田，愛

金沢大学人間社会研究域学校教育系：准教授

<https://doi.org/10.15017/1650644>

出版情報：中国文学論集. 44, pp.98-114, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

蘇詞集編纂考

原田 愛

詞のみを集めた文集（以下「詞集」と略称）は宋代から編纂された。村上哲見氏は「詞と詩が区別されるについては、それなりに歴史的な経緯があり、その萌芽期、つまり中唐の詩人たちが長短句の詞の創作に手を伸ばしはじめたころは、ことさらに詩と区別しようとはしていない。というのは、明らかに歌辞である長短句の詞を、詩集の中に収録している例があるからである」とし、更に、稀に例外はあるものの、「宋代になると詞は詩とはつきり区別され、従って詩集から排除されることになっている」と述べ、その例の一つに蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士、一〇三七—一一〇一）を挙げた。蘇軾は、詩・文・書・画などあらゆる分野に才能を発揮したが、詞においても彼が創始した豪放な作風は新たな表現方法を与えたと言われる。では、そうした蘇軾の詞は如何にして編纂され、伝承されたのか。

蘇軾の詩文集、即ち蘇集について、筆者はこれまで北宋における源流の様相、そして、南宋にかけての編纂過程をそれぞれ考察してきた。自ら別集である『欒城集』を編纂した弟の蘇轍（字は子由、一〇三九—一一一二）とは異なり、蘇軾は門人である陳師仲・劉沔による別集の編纂を経て、更に蘇轍や末子の蘇過（字は叔党）の助力により増補・校正を行い、『東坡集』『東坡後集』『和陶詩集』を編定した。しかし、詞集はそれに該当せず、また、不確定な要素が多かったため論及を避けていた³。本稿では、蘇軾の歿した北宋末から現在の定本とされる『東坡樂府』が刊行される元代までの蘇詞集編纂の流れを辿り、各時代の蘇詞集の在り方を明らかにしたい⁴。

一、北宋末における蘇詞集——編纂の源流

山本和義氏は蘇軾の官界における人生を四期に分けて説明した⁵⁾。科挙応挙から烏台詩案までを一期とし、以後、黃州流謫を二期、元祐更化を三期、嶺外流謫から死去までを四期とする。これは彼の文学創作においても大きな分岐点とされる。そこで、中華書局刊『蘇軾詞編年校注』⁶⁾に拠って各期の詞を数えると以下のようになる（※編年詞二九二首あり。未編年詞三九首、殘句十一則は除外する）。

- 第一期（嘉祐六年（一〇五六）三月～元豐二年（一〇七九）十二月 蘇軾21歳～44歳）…一〇九首
- 第二期（元豐三年（一〇八〇）正月～元豐八年（一〇八五）三月 蘇軾45歳～50歳）… 九九首
- 第三期（元豐八年（一〇八五）四月～元祐八年（一〇九三）十二月 蘇軾50歳～58歳）… 五六首
- 第四期（紹聖元年（一〇九四）正月～建中康國元年（一一〇二）七月 蘇軾59歳～66歳）…二八首

蘇軾の詞に対する創作意欲は偏向しており、主に壮年期に集中したことが窺える。因みに、蘇軾が前半生の集大成として『東坡集』四十巻を編纂したのは元祐六年（一〇九一）頃のこと、元祐六年（一〇九一）までに創作された蘇詞の総数は既に二五六首であり、現存する蘇詞のほぼ八割に相当するが、詞集の編纂は行われなかった。前述したように、蘇軾の生前に世に流伝した文集は、蘇軾が主に門人が編纂を行い、その後、蘇軾が認定するという方式を採ったが、詞集については彼の中でも優先順位が低かったのか、管見の及ぶ限り、詞集の編纂や伝承に蘇軾が意欲を示した資料は見られない。蘇軾の死の翌年に蘇轍が撰述した蘇軾の墓誌銘にも言及がないことから、蘇軾の生前に彼の意志を反映した詞集は編纂されなかった可能性が高い。

しかし、今に伝わらないものの、北宋末に編纂された二本の蘇詞集が存在していた。

(1) 張康国編『蘇詞』（仮称)

蘇詞集編纂考

(2) 編者未詳蜀本『蘇詞』(仮称)

この二本は、南宋に至って『東坡先生長短句』を編纂した曾慥(字は端伯、号は至游居士)の跋文に、編纂の際に用いた校正資料として以下のように列挙された。

『東坡先生長短句』既鏤板、復得張賓老所編、并載於蜀本者、悉收之。江山麗秀之句、樽俎戲劇之詞、搜羅幾盡矣。傳之無窮、想像豪放風流之不可及也。紹興辛未孟冬至游居士曾慥題。

『東坡先生長短句』は既に鏤板し、復た張賓老の編む所を得、并せて蜀本に載せる者、悉く之を収む。江山麗秀の句、樽俎戲劇の詞、搜羅して幾んど尽くさん。之を無窮に伝へて、豪放風流の及ぶべからざるを想像するなり。紹興辛未孟冬至游居士曾慥題す。

つまり、紹興二十一年(一一五一)に曾慥が『東坡先生長短句』を編纂するより以前に世に通行していた蘇詞集はこの二本であった。特に(1)の編者である張康国(字は賓老、一〇五六―一一〇九)は元豊二年(一一七九)の進士で、蘇軾とほぼ同時代人であるが、生涯を通じて蘇軾と交遊した記録は見られない。彼は崇寧三年(一一一四)九月に翰林学士承旨から尚書左丞に昇進したが、それを記した『統資治通鑑』の記事に次のように紹介されている。

康国、揚州人。紹聖中、蔡京治役法、薦爲屬。及京當國、定元祐黨籍、置看詳講議司、編彙章牘、康国皆預密謀、故京引援之甚力。自福建轉運判官不三歲、入翰林爲承旨、遂登政府。復以其兄康伯、代爲翰林學士。

〔張〕康国、揚州の人なり。紹聖中、蔡京役法を治めしとき、薦めて属と爲す。京当国するに及び、元祐黨籍を定め、看詳講議司を置き、章牘を編彙するは、康国皆密謀に預かり、故に京之を引援すること甚だ力む。福建轉運判官より三歳ならずして、翰林に入りて承旨と爲り、遂に政府に登る。復た其の兄康伯を以て、代へて翰林學士と爲す。

即ち、張康国は蔡京の右腕として活躍した人物であり、蘇軾を含む元祐党人およそ百二十人の名を刻んだ「元祐党籍碑」の設置や、元祐党人を断罪する根拠とするための「編類章疏」に携わるなど、「元祐党禁」の執行に深く関与していた^⑨。そのような蘇軾の対極に在った人物が如何にして蘇詞を集め、詞集として編纂するに至ったのか。

実は張康国には、蘇軾と繋がり深い人物とのコネクションがあった。彼の一族である揚州張氏には、科擧の応募から蘇軾・蘇轍を後援した張方平（字は安道、一〇〇七—九一）がおり、蘇軾は張方平の別集『樂全先生文集』の校閲及び序文の撰述を行い、その歿後にも彼の墓誌銘を撰述するなど一族間の交遊は継続していた^⑩。また、元祐七年（一〇九二）十月、張康国は范祖禹によって饒州教授に推挙され、任官した。更に、その頃から死去するまでの十八年間に、張康国に仕えた側近の韓持正（字は存中）は潁川韓氏であり、潁川、即ち潁昌府は蘇軾歿後の蘇轍や蘇過などの蘇氏一族が居住したところで、元祐党禁による弾圧を避けた范氏一族や韓氏一族の多くも縁故を頼って潁昌府に居を移した^⑪。韓持正も、詳しい時期は不明ながら、蘇轍の末子蘇遜（字は叔寛）や、蘇過の親友で姻戚でもある范蓼（字は信中）、呂本中（字は居仁）などと交際していたという^⑫。

張康国は崇寧四年（一一〇五）二月に知樞密院事となった頃から蔡京との間に隔意が生じ、徽宗の密命を受けて蔡京を退げんと画策した。その後、その政争の最中の大觀三年（一一〇九）三月に暴死したことから毒殺の説もあるという。劉尚榮氏は張康国の蘇詞集編纂の時期について、「其所編東坡詞、当在晚年与蔡京分道揚鑣之後^⑬」と述べており、つまり、崇寧四年（一一〇五）から大觀三年（一一〇九）の間とする。范祖禹に「敏而好學、文雅有餘（敏にして学を好み、文雅余り有り）」と評された張康国は、おそらく蘇軾とその政治的な見解、処世観などの一致はせず、直に交際する機会は持たなかったものの、自らの権力とコネクション、その文才を駆使して、蘇詞集を編纂したのであろう。

また、(2)の蜀本については、蘇軾の故郷である蜀において刊行された詞集であり、当時の有力な通行本の一つであったと考えられるが、これも今に伝わらないため詳細は不明である。

二、南宋における蘇詞集——再編集と注釈の出現

靖康の変によって南遷した後、成立した南宋において、蘇軾の名誉は徐々に回復し、それに伴って多くの文集が再刊された。詞集の編纂もそうした流れを受けたものと言える。

(3) 曾慥編『東坡先生長短句』二卷、『拾遺』一卷

(4) 編者未詳『東坡樂府』二卷

(5) 編者未詳『東坡詞』二卷

(3)については前章で言及したが、紹興二十一年(一一五一)に曾慥が北宋末に編纂された二本の蘇詞集を参照しつつ、蘇詞を網羅せんとして編纂したものである。曾慥はその五年前の紹興十六年(一一四六)に北宋の名家の詞を集めた『樂府雅詞』三巻及び『拾遺』二巻を撰しており、そこで蘇詞は収めずに別に編纂したことから、蘇軾を特別視していたことが判る。原本は散逸したが、明の呉訥編『唐宋名賢百家詞』に収める『東坡詞』上下二巻、『拾遺』一卷は(3)を抄録したものと言われており、天一閣鈔本と紫芝漫鈔本が今に伝わる。^⑭

(4)は、清の季振宜(字は説兮、号は滄葦、一六三〇—一七四)の『延令宋版書目』に『東坡樂府』上下二巻」と記録があることから、南宋刊本の『東坡樂府』が存在していたと見られる。因みに、『延令宋版書目』には『東坡長短句』も記されており、『東坡長短句』十二巻」とある。これは巻数や書名から、(3)のことではなく、後掲の(6)もしくは(7)を指すのではないかと推測する。

(5)は、南宋の陳振孫(字は伯玉、号は直齋、一一七九—一二六二)の『直齋書録解題』巻二十一に『東坡詞』二巻」とあり、また、『宋史』芸文志の云う『詞』一卷」はこれを指すと考えられる(巻数は誤りか)。更に、陳振孫は蘇詞の「戚氏」の挿話を李之儀が紹介した跋文に言及して「今坡詞多有刊、去此篇者(今坡詞多く刊する有るも、此の篇を去る者なり)」と述べる。^⑮ここから南宋には多くの蘇詞集が刊行されていたことが判る。その中には以下に

挙げるような注釈本もあった。

(6) 傳幹撰注『注坡詞』十二卷

(7) 顧禧撰注『補注東坡長短句』

(6)の傳幹(字は子立)は、福建仙溪の人で、蘇軾の和陶詩に注釈した『東坡和陶詩解』十卷を撰した傳共(字は洪甫)の族子である。これは現存する中では最古の蘇詞集で、六十七調二七二首を収録する。洪邁『容齋統筆』巻十五「注書難」に「紹興初、又有傳洪秀才『注坡詞』、鏤板錢塘(紹興の初め、又た傳洪秀才の『注坡詞』有り、板を錢塘に鏤む)」とあるように、紹興年間(一一三一―一六二)初頭に錢塘にて刻された。よって、実は(3)よりもその編纂時期は早く、また、その内容に鑑みて(3)と同様に(1)・(2)の成果に基づくものである。且つ、仙溪傳氏には、傳共・傳幹のほか、今は殘巻が伝わるのみではあるが、蘇詩の初期の注釈本である『集註東坡先生詩前集』十八巻の十注の一人であり、『東坡紀年録』を著した傳藻(字は薦可)がおり、傳幹の注釈がそうした傳氏一族の長年の蓄積に拠ることは疑いない。傳共は(6)の序文を担当しており、そこに次のように述べる。

東坡□□□□天下、其爲長短句數百章、……然其寄意幽渺、指事深遠、片詞隻字、皆有根柢。是以世之玩者、未易識其佳處。……余族子幹、嘗以舊□□□□□□、用事彰而解之、削其附會者數十、□□□□、益之以遺軼者百餘□、□十有二卷。敷陳演析、指摘源流、開卷爛然、衆美在目。予曰「茲一奇也。……」自茲以往、列屋閑居、交口教授、吾知秦柳晁賀之倫、束於高閣矣。幹、字子立、博覽強記、有前輩風流、視其所作、可以知其人焉。竹溪散人傳共洪甫序。

東坡の□□は天下に□□し、其れ長短句數百章を爲り、……然れば其れ意に寄れば幽渺、事を指せば深遠にして、片詞隻字も、皆根柢有り。是を以て世の玩する者、未だ其の佳き処を識るに易からず。……余の族子幹、嘗て旧□を以て□□□□□□、事を用て彰らかにして之を解き、其の附会する者數十を削りて、□□□□、之

を益するに遺軼する者百余□、□十有二卷なり。演析を敷陳し、源流を指摘し、卷を開けば爛然にして、衆美目に在り。予曰く「茲れ一奇なり。……」と。茲より以て往きて、屋を列ねて閑居し、交口して教授すれば、吾秦柳晁質の倫を知り、高閣に束ぬ。幹、字は子立、博覽強記にして、前輩の風流有り、其の作る所を視れば、以て其の人を知るべし。竹溪散人傳共洪甫序す。

このように、傳幹は最初の注釈を行った人物であり、その際、多くの文人の詞論や故事の知識を駆使したという。列ねた家屋にて閑居していた傳幹のもとに赴き、「交口して教授」したと傳共が述べるように、傳氏一族においては各人が蘇軾の詩詞を学び、その知識を一族内で共有していたことが判る。但し、その注釈には洪邁を筆頭に元や明においても多くの批判があり、その評価は毀誉相半ばする。

(7)の注釈者顧禧(字は景繁)は、南宋の蘇詩注釈の一翼を担う『施顧註東坡先生詩』四十二卷の注釈も行った。これは施元之(字は徳初)が中心となつて編纂、顧禧がそれを補助し、施元之の子である施宿(字は武子)が補完して出版を行ったという。但し、(7)は現存せず、南宋の陳鵠(字は西塘)の『耆旧統聞』卷二に、「趙右史家有顧禧景蕃補注東坡長短句真迹云……(趙右史の家に顧禧景蕃の東坡長短句の真迹に補注する有りて云ふ……)」という記録があることから、過去における存在が確認されるのみである。顧禧は経歴も不明なところが多く、その編纂時期も判然としないが、彼と同世代と思われる施元之は紹興二十四年(一一五四)の進士であり、陸游(字は務観、号は放翁、一一二五—一二〇九)が施宿の要請によつて『施顧註東坡先生詩』の序文を作成したのが嘉泰二年(一一二〇)であつたが、この時点で施元之は故人であつた。『施顧註東坡先生詩』の正式な刊行は嘉定六年(一二一三)である。(7)の編纂もこの同時期か若干後の時期と考えられる。また、陸游は「司諫公以絶識博學名天下、且用工深、歴歳久、又助之以顧君景蕃之該洽、則於東坡之意、蓋幾可以無憾矣(司諫公(施元之)は絶識博學を以て天下に名あり、且つ用工深く、歴歳久しく、又た之を助くるに顧君景蕃の該洽たるを以てすれば、則ち東坡の意に於いて、蓋し幾くも以て憾むこと無くべからんや)」と評したが、(7)もその「該洽」たる学識によつて注釈が行われたのである。

このように、南宋においては、北宋からの資料を基に蘇詞を集大成した詞集と、蘇詞の注釈本が編纂され、ここ

に蘇詞集の原形が定まった。また、南宋で刊行された二本の注釈本いずれもが詩集編纂に関わる人物によるものであり、傅幹・顧禧の蘇詞の注釈が蘇詩の注釈の影響を受けて行われたことが窺えよう。

三、金における蘇詞集——選集の出現

靖康の変より以後、モンゴルに滅ぼされるまで北を治めた金においても、蘇軾の詩文は多くの読者を得た。詞に ついても同様であったが、金人が如何なる蘇詞集を読んだのかは不明である。しかし、おそらく金では(4)の『東坡樂府』二巻かその系統本が流伝していたのであろう。それは、金人による以下の詞集があるからである。

(8) 孫鎮撰注『注東坡樂府』

(9) 元好問撰輯『東坡樂府選集』

但し、この二本は今はいずれも散逸している。(8)は承安二年(一一九七)の進士である孫鎮(字は安常)による注釈本で、清の黃虞稷(字は兪邵、一六二九—一九一)の『千頃堂書目』卷三十二に「孫鎮『注東坡樂府』」とあり、また、(9)の編者である元好問(字は裕之、一一九〇—一二五七)による自序に以下の言及がある。

絳人孫安常注坡詞、參以汝南文伯起『小雪堂詩話』、刪去佗人所作「無愁可解」之類五十六首、其所是正、亦無慮數十百處、坡詞遂爲完本、不可謂無功。

絳の人孫安常は坡詞に注し、參するに汝南文伯起の『小雪堂詩話』を以てし、佗人の作る所の「無愁可解」の類五十六首を刪去し、其の是正する所、亦た數十百處を慮ること無く、坡詞遂に完本と爲り、功無きと謂ふべからず。

元好問「東坡樂府集選引」(『遺山先生文集』卷三十六)

汝南、即ち蔡州の人である文商（字は伯起）は当時の蘇軾の熱心な信奉者の一人であった。彼には王寂（字は元老、一一二八—一九四）との交遊が王寂の別集『拙軒集』所収の詩から窺え、また、王若虚（字は從之、一一七四—一二四三）の『滹南遺老集』にもその評論が見える。文商は自らの書堂あるいは号を蘇軾が黃州時代に建てた「雪堂」に因んで「小雪堂」とし、蘇軾の詩詞について評論した『小雪堂詩話』を著した。これは現在散佚しているものの、当時高く評価されていたらしい。孫鎮はその『小雪堂詩話』を参照し、蘇詞の注釈を完成させた。元好問は、そのようにして「完本」を定めた孫鎮の功績を称えたのである。元好問の編纂した金人の詩詞を集めた『中州集』巻七に孫鎮の詩「許氏雙桂堂」が収録されており、その経歴が略述されている。

孫省元鎮。鎮、字安常、絳州人。高才博學、嘗中省試魁、承安二年、五赴廷試賜第。以陝令致仕、年八十四卒。有『注東坡樂府』『歷代登科記』、行於世。弟、寧州刺史錡、字安世、潘原令鉉、字安道、同榜擢第。鄉人榮之、號三桂孫氏。安常孫誦、思美、軍府參佐、安世孫處謙・志全、安道孫蔚、今俱在。

孫省元鎮。鎮、字は安常、絳州の人。高才博學にして、嘗て省試の魁に中し、承安二年、五たび廷試に赴き賜第す。陝令を以て致仕し、年八十四にして卒す。『注東坡樂府』『歷代登科記』有り、世に行ふ。弟、寧州刺史錡、字は安世、潘原令鉉、字は安道、同榜擢第す。郷人は之を榮とし、三桂孫氏と号す。安常の孫は誦、〔字は〕思美、軍府參佐なり、安世の孫は處謙・志全、安道の孫は蔚、今俱に在り。

このように、孫鎮は絳州、即ち現在の山西省の南西部の出身であり、同じく山西の太原府忻州の人である元好問との縁故があったかと推測する。というのも、ここに元好問が孫鎮兄弟の孫たちが健在であることを明記しているからである。また、南宋の注釈本と比較すると、(8)の編纂は(7)とほぼ同時期であろう。

(9)は(8)から元好問が七十五首の詞を採録した選集である。元好問はそのまま機械的に選び出すのではなく、句や注釈について自ら考証した上で選んだ。彼は序文にて(8)の紹介を行った後、所収の蘇詞のうち、「南柯子（南歌子）」の句の考証を行い、「沁園春（赴密州早行馬上寄子由）」は蘇軾の作に非ずと断じ、更に以下のように述べた。

又前人詩文、有一句或一二字異同者、蓋傳寫之久、不無訛謬。或是落筆之後、隨有改定。而安常一切以別本爲是。是亦好奇尚異之蔽也。就孫集錄取七十五首、遇語句兩出者、擇而從之。自餘「玉龜山」一篇、予謂非東坡不能作、孫以爲古詞刪去之、當自別有所據。姑存卷末以俟更考。丙申九月朔、書于陽平寓居之東齋、元某引。

又た前人の詩文、一句に或は一二字の異同有る者、蓋し伝写の久しくして、訛謬無きにもあらず。或は是れ落筆の後、随ひて改定すること有らん。而して安常一切別本を以て是と爲す。是も亦た奇を好み異を尚ぶの蔽なり。孫集に就きて七十五首を録取し、語句兩出する者に遇へば、択して之に従ふ。自余「玉龜山」一篇は、予は東坡の作ること能はざるに非ずと謂ふも、孫は以て古詞と爲し之を刪去するは、當に自ら別に拠る所有るべし。姑く卷末に存して以て更考するを俟たん。丙申九月朔、陽平寓居の東齋に書す、元某引す。

元好問は、異同について「一切別本を以て是と爲」した(8)には「奇を好み異を尚ぶの蔽」が見られるとし、語句に兩説がある場合は自ら考証して選択した。また、孫鎮が蘇軾の作ではなく昔の詞として採録しなかつた「玉龜山」を、元好問は蘇軾の作である可能性も捨てきれず、卷末に配して後人の考証を待つことにしたという。因みに、元好問は正大六年(一二二九)に『東坡詩雅』三卷という選集を編纂した。その序文で六朝や唐以来の「風雅」即ち正統なる「五言詩」を推奨し、特に陶淵明・柳宗元を敬仰して詩作したのが蘇軾であると述べ、彼の五言詩のうち「風雅」なるものを集めて『東坡詩雅』を成した。この五年後の天興三年(一二三四)に金はモンゴルによって滅んだが、元好問が(9)を編纂したのは、その二年後の一二三六年(モンゴルは太宗八年、南宋は端平三年)九月のことである。『東坡詩雅』は金人の修学を推進せんとして行った文化事業であつたが、更に、(9)を編纂することによつて、金人であり山西人である孫鎮の蘇詞編纂の業績を世に示しつつ、誤りを正してその内容を高めようとしたのである。そして、これが現在確認される中で最初の蘇詞の注釈付き選集本であつた。

四、元における蘇詞集——旧版への回帰

金と宋を併呑した元においては、新たな形態の蘇詞集が刊行されることはなかった。しかし、蘇詞集として最も有名であり、蘇詞集の定本と言われるものが編纂された。

(10) 葉會編『東坡樂府』二卷

これは元延祐庚申刊本と言われており、延祐七年（一二二〇）に元の葉會が刊刻した。上卷四十一調一一五首、下卷二十七調一六六首、総計で六十八調二八一首の詞を収録する。その自序に刊行の経緯が記されている。

今之長短句、古三百篇之遺旨也。自風雅隳散、流爲鄭衛侈靡之音、不能覆古之淳厚久矣。東坡先生以文名於世、吟詠之餘、樂章數百篇、樂而不淫、哀而不傷、眞得六義之體。觀其命意吐詞、非涉學窺測。好事者或爲之注釋、中間穿鑿甚多、爲識者所誚、舊板湮沒已久。余有家藏善本、再三校正一新、刻梓以永流布。使先生文章之光焰、復盛於明時、不亦幸乎。延祐庚申正月望日、括蒼雲深葉會刻於雲間南阜書堂。

今の長短句は、古の三百篇の遺旨なり。風雅隳散してより、流して鄭衛の侈靡の音を爲し、古の淳厚なるに覆する能はざること久し。東坡先生は文を以て世に名あり、吟詠の余、樂章數百篇、樂しみて淫せず、哀しみて傷まず、眞に六義の体を得たり。其の命意吐詞するを觀、涉學窺測するに非ず。好事の者或は之の爲に注釈し、中間穿鑿すること甚だ多く、識者の誚むる所と爲り、旧板湮没すること已に久し。余家蔵の善本有り、再三校正して一新し、梓に刻みて以て永へに流布せんとす。先生の文章の光焰をして、復た明時に盛んならしめば、亦た幸ひならずや。延祐庚申正月望日、括蒼雲深葉會雲間南阜書堂に刻す。

前述した(1)～(9)の詞集は勿論のこと、おそらくは他の蘇詞集も書肆などによって続々と刊行されており、その上、

ここに「好事の者或は之の為に注釈し、中間穿鑿すること甚だ多く、識者の誦むる所と為」ったとあるように、(6)を始め、注釈本が多数刊行されたのであろう。しかし、その一方で、「旧板」、即ち昔から伝わる蘇詞集が「湮没すること已に久し」という状況であった。そこで、葉曾は括蒼の自家の書堂において、「古の淳厚なるに覆する」意味も込めて蘇詞集の旧版の復刻を考えた。

括蒼は、浙江の南西部に位置し、南隣は福建である。北宋以来、浙江は出版業が盛んな地域であり、蘇軾の生前から特に杭州（臨安）にて多くの蘇軾文集が出版され、同じく福建も出版業が盛行しており、南宋では『王状元集百家註分類東坡先生詩』二十五卷や蘇轡編『東坡別集』四十六卷などが刊行された。詞集について云えば、南宋のもの多くは浙江で刊行され、(6)は傅氏の故郷である福建仙溪にて編纂された後、浙江の錢塘で刊刻された。そして、浙江括蒼に居住する葉曾は南宋伝来の家蔵の善本を基礎に多くの通行する別本によって「再三校正して一新し」という。これは特に清人に評価され、顧広圻（字は千里）や黄丕烈（字は紹武、号は蕘圃）などが激賞した。また、これまで挙げた(1)〜(10)のうち、今に伝わるのは(6)及び(10)のみで、(10)は定本として珍重された。それは北宋以来の知識を集大成して編纂されたことや、注釈を除外して簡便なる形に回帰したことが却って評価を高めたためであった。

終わりに

蘇軾の詞集は、彼の生前からではなく、歿後に編纂が始まった。その形態は、全ての詞を網羅した詞集に始まり、南宋には注釈本が出現した。北の金においても同様であったが、そこから幾首かを選出して編んだ選集を元好問が刊行した。南宋において既に多くの蘇軾の詩の注釈本があり、その知識の蓄積によって詞の注釈本も大部なものになったが、一方で、それは蘇詞を賞翫し、また、読者が自らの創作に活用するには不便であった。その後の金における選集の出現、元における旧版への回帰という流れは、蘇詞が長らく愛好されたことと同時に、元来遊戯的要素の強い詞という文学形態が影響した結果でもあろう。

また、それぞれの蘇詞集の編纂と伝承は地縁や血縁に依拠するところが大きい。時代が変遷していく中において

も、蘇詞集は編者・注釈者を支えた地縁・血縁によって編纂が行われ、伝承されていたのである。

北宋	南宋／金	元
張康国本	會慥編『東坡長短句』	葉會編『東坡樂府』
蜀本	南宋刊『東坡樂府』 南宋刊『東坡詞』	
	傳幹注『注坡詞』	
	顧禧注『補注東坡長短句』	
	孫鎮注『注東坡樂府』	
	元好問輯『東坡樂府選集』	

注

- (1) 村上哲見「詩と詞——中国における詩の正統意識——」（『中国文人論』所収、汲古書院、一九九四年）、六〇頁〜六二頁。
- (2) 『四庫全書總目提要』の蘇轍『欒城集』においても「蓋集爲轍所手定、與東坡諸集出自他人哀輯不同」と指摘される。蘇轍は『欒城集』五十卷、『欒城後集』二十四卷、『欒城三集』十卷の計八十四卷を自ら編纂した。
- (3) 注(7)の蘇軾の墓誌銘に記述があるように、和陶詩を集めた詩集は蘇軾の生前にほぼ編纂されていたものの、書名は定められていなかった。現存する南宋黄州刊本の書名は『東坡先生和陶淵明詩』であるが、本稿では『和陶詩集』と略称。北宋・南宋の蘇集編纂については、拙稿「蘇集源流考」（『中国文学論集』第四十二号、九州大学中国文学会、二〇一三年）、同「南宋蘇集編纂考」（『中国文学論集』第四十三号、九州大学中国文学会、二〇一四年）参照。
- (4) 主な先行研究として、劉尚栄「蘇軾著作版本論叢」（巴蜀書社、一九八八年）所収「蘇軾詞集版本綜述」及び「鈔本《注坡詩》考辨——兼談《東坡樂府箋》」がある。

- (5) 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩選』(岩波文庫、一九七五年) 中の山本和義「解説」参照。
- (6) 郷同慶・王宗堂『蘇軾詞編年校注』上中下全三冊(中華書局、二〇〇二年)。
- (7) 蘇轍「亡兄子瞻端明墓誌銘」(欒城後集)卷二十二には「有『東坡集』四十卷、『後集』二十卷、『奏議』十五卷、『內制』十卷、『外制』三卷。公詩本似李杜、晚喜陶淵明、追和之者幾遍、凡四卷」とあるが、蘇詞集には言及がない。
- (8) 曾慥の跋文は注(16) 吳訥編『唐宋名賢百家詞』所収「東坡詞拾遺」に「東坡拾遺跋語」として収録。
- (9) 洪邁『容齋四筆』卷十五「徽廟朝宰輔」に「蔡京擅國命、首尾二十餘年、一時士大夫、未有不因之以至大用者、其後頗采公議、與爲異同。……其居執政位者、如張康國寶老・溫益禹弼・劉達公路・侯蒙元功者、皆有可錄。康國定元祐黨籍、看詳講議司、編彙奏牘、皆深預密議。及後知樞密院、始浸爲崖異」とある。よって、『続資治通鑑』で「置看詳講議司」の「詳」が脱字となつているところを本稿では改めたが、これは崇寧元年(一一〇二)七月、王安石による制置三司條例司の設置に倣つて尚書省に「講議司」が置かれたことを指す。また、『宋史』徽宗本紀によると、「元祐黨籍碑」は崇寧元年(一一〇二)九月に端礼門に建てられ、翌崇寧二年(一一〇三)九月には全国の役所に設置されたという。「編類章疏」は「元祐臣僚章疏」の編纂を指し、紹聖元年(一一〇九四)四月、章惇・蔡卞等の主導によつて始まるが、紆余曲折の後、崇寧三年(一一〇四)二月に「是月、詔翰林學士張康國編類『元祐臣寮章疏』」と記載がある(『続資治通鑑』)。
- (10) 蘇軾「張文定公墓誌銘」(『蘇軾文集』卷十四)に「公姓張氏、諱方平、字安道。其先宋人也、後徙揚州」とある。蘇軾「樂全先生文集跋」は「蘇軾文集」卷十に収録されており、「軾年二十、以諸生見公成都、公一見待以國士。今三十餘年、所以開發成就之者至矣、而軾終無所效尺寸於公者、獨求其文集、手校而家藏之、且論其大畧、以待後世之君子」と述べる。
- (11) 范氏一族や、蘇轍・蘇過の潁昌府隱棲については、拙稿「蘇轍による蘇軾「和陶詩」の繼承」(『日本中国学会報』第六十三集、二〇一一年)参照。潁川韓氏には、蘇軾の曾孫蘇峴の墓誌銘(「朝散郎秘閣修撰江西南西路轉運副使蘇公墓誌銘」『南澗甲乙稿』卷二十一)も書いた韓元吉があり、彼の一家は潁昌府に居住していた。韓元吉「書許昌唱和集後」(『南澗甲乙稿』卷十六)によると、祖父韓璿(字は君表、韓維の孫)が通判潁昌府軍府事であつた折、葉望得や

蘇過など当地の文人と詩文の応酬を行って交遊を深めたという。蘇過『斜川集校注』巻五には、韓瑄の詩に和韻した「次韻和韓君表讀淵明詩、餽曾存之置酒唱酬之什」、また、韓縝の子である韓宗武（字は文若）の詩に和韻した「次韻韓文若展江六詠」が収録されている。

- (12) 朱弁『曲洧旧聞』巻六に「韓持正侍郎、字存中、雖爲張寶老所知在、從班十八年、無所附麗。故蔡京不喜、大觀以後、多偃藩於外。能知本朝典故、談祖宗時事、歷歷如在目前」とある。韓持正は唐の韓愈の子孫で、「修武韓文公門譜」の序文で「知鄭州十世裔孫穎川持正存中頓首」と著名している。また、張擴『送韓存中侍郎赴隨州』（『東窓集』巻一）に「今年河陽歸、坐穩得處所。開關逢俗人、却走唾腐鼠。禪房大如掌、僅著范蘇呂」とあり、自注で「范信中・蘇叔寬・呂居仁」と記す。

- (13) 注(4) 劉尚栄『蘇軾詞集版本綜述』参照。

- (14) 范祖禹『薦張康國劄子』（『范太史集』巻二十四「奏議」）より引く。また、同「手記」（『范太史集』巻五十五）にも「饒州教授改官、徐鐸榜及第。元祐七年、薦學官」とある。

- (15) 曾慥『樂府雅詞』の自序に「予所藏名公長短句、裒合成篇、或後或先、非有詮次、多是一家、難分優劣。涉諧謔、則去之名曰『樂府雅詞』。九重傳出、以冠于篇首、諸公轉踏次之。歐公一代儒宗、風流自命、詞章幼眇、世所矜式。當時小人、或作艷曲、謬爲公詞。今悉刪除、凡三十有四家、雖女流亦不廢。此外又有百餘闋、平日膾炙人口、咸不知姓名、則類于卷末、以俟詢訪、標目『拾遺』云。紹興丙寅上元日、溫陵曾慥引」とある。

- (16) 注(4) 劉尚栄『蘇軾詞集版本綜述』参照。天一閣鈔本の吳訥編『唐宋名賢百家詞』（天津圖書館藏珍本叢書、天津古籍出版社、一九八九年）所収の『東坡詞』は上巻一一四首、下巻一五七首、拾遺四〇首を収録（そのうち重複や誤りによる混入が十一首あり）。

- (17) 季振宜『季滄葦書目』（書目五編所収、廣文書局、一九七二年）の『延令宋版書目』参照。

- (18) 陳振孫『直齋書錄解題』（上海古籍出版社、二〇〇六年）。蘇軾「戚氏」は『東坡樂府』上巻に収録されており、これは李之儀「跋戚氏」（『姑溪居士前集』巻三十八）を指す。

- (19) 洪邁『容齋統筆』巻十五「注書難」は、「注書至難、雖孔安國・馬融・鄭康成・王弼之解經、杜元凱之解左傳、顏師

古之注漢書、亦不能無失」と述べ、数例の後に『注坡詞』に言及し、更に「至於「不知天上宮闕、今夕是何年」、不能引「共道人間惆悵事、不知今夕是何年」之句。「笑怕蔷薇冑」「學畫鴉黃未就」、不能引「南部煙花錄」、如此甚多」と、その注釈の不備を指摘する。

(20) 傅幹『注坡詞』（北京図書館出版社、二〇〇一年）参照。

(21) 注（4）劉尚栄「鈔本『注坡詩』考辨——兼談《東坡樂府箋》」参照。

(22) 陸游「施司諫註東坡詩序」（『渭南文集』卷十五）。

(23) 黄虞稷『千頃堂書目』全三冊（書目叢編、廣文書局、一九六七年）。

(24) 王寂『拙軒集』の卷二に一首あり、また、唱和詩として「兒子以詩酒送文伯起、既而復繼三詩。予喜其用韻頗工、爲和五首」及び「伯起善用強韻、往復愈工、再和五首」（同卷三）があり、「與文伯起帖」（同卷六）も収録されている。王若虚『滹南遺老集』卷三十一「著述辨惑」において、王若虚は、蘇軾を忠臣とする南宋の趙夔（字は堯卿）や文商の説に疑義を呈する。また、同卷三十九「詩話」においても「文伯起曰『先生慮其不幸而溺于彼、故援而止之、特立新意、寓以詩人句法。』是亦不然。公雄文大手、樂府乃其游戲、顧豈與流俗爭勝哉。蓋其天資不凡、辭氣邁往、故落筆皆絕塵耳」と述べる。金代の蘇軾文学の受容については胡伝志『金代文学研究』（安徽大学出版社、二〇〇〇年）参照。

(25) 元好問「東坡詩雅引」（『遺山先生文集』卷三十六）に「五言以來六朝之謝陶、唐之陳子昂・韋應物・柳子厚、最爲近風雅。自餘多以雜體爲之、詩之亡久矣。雜體愈備、則去風雅愈遠、其理然也。近世蘇子瞻絕愛陶柳二家、極其詩之所至、誠亦陶柳之亞。然評者尚以其能似陶柳、而不能不爲風俗所移、爲可恨耳。夫詩至於子瞻、而且有不能近古之恨、後人無所望矣。乃作『東坡詩雅』。目錄一篇。正大己丑、河南元某書於内鄉劉鄧州光父之東齋」とある。

(26) 葉曾編『東坡樂府』（上海古籍出版社、二〇〇三年）参照。

(27) 注（3）拙論参照。蘇軾の生前から宋代の蘇集の多くは浙江・福建・蜀で出版された。

(28) 黄丕烈『堯圃藏書題識』卷十の「東坡樂府二卷元本」の跋文を参照。

中国文学論集 第四十四号

※本稿は平成二十六年日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)「東アジアにおける蘇軾文集の成立と伝承に関する研究」(課題番号:26770128)の交付を受けた研究成果の一部である。